うたとかたりの対人援助学

第 34 回「言文研 2025 連続講座を振り返って」

鵜野　祐介

はじめに

今年（2025 年）10 月、立命館大学国際言語文化研究所 2025 年度連続講座の統括コーディネーターを務めた。総合テーマを「ユニバーサルデザインとしてのヴァナキュラーな歌と語りの人類学」を掲げて、10 月 10 日、17 日、24 日、31 日の４回にわたって対面とオンラインで開催した。

本号では、この講座の趣旨とプログラムを紹介した後、終了後にお寄せいただいた発表者や参加者の方々のコメントを掲載し、講座のねらいがどこまで実現できたのかについて振り返ってみたい。

原則として、元の文章をそのまま引用したが、プライベートな内容に関わる箇所などを一部割愛・修正させていただいたことをお断りしておく。

講座の趣旨とプログラム

この講座の趣旨について、案内チラシに次のように記した。「ユニバーサルデザインとは、高齢者も子どもも障害者も、異なる社会や言語文化の成員も、できるだけ多くの人びとが使えるように想定してデザインするという考え方である。 民間に伝承されてきた歌謡や説話をはじめとするヴァナキュラー（《俗》）な歌や語りには、自分とは異なる世界や社会にある 他者と繋がるためのユニバーサルデザインの可能性がある。今年度の連続講座では、多様な世界や社会におけるヴァナキュラーな歌や語りの実演を交えながら、多文化共生社会の実現に向けての具体的な方策を提示すると同時に、人はなぜ歌い、語る のかという人類史的な問いを提起することを企図する」。

次に、各回のテーマと発表者や内容について紹介しておく。

第１回「触文化とろう文化における歌と語り」

▷広瀬浩二郎（国立民族学博物館教授）「触文化とユニバーサル・ミュージアム」

▷半澤啓子・穀田千賀子（仙台市、手話民話の語り部）「手話で民話を語る」

▷藤岡扶美（吹田市、手話うたパフォーマー）「ろう者も聴者も一緒に歌い演じる」

・コーディネーター・司会・コメンテーター：鵜野祐介（立命館大学文学部教授）

――視覚障害者の触文化、聴覚障害者のろう文化、両者はそれぞれマイノリティ社会における独自の歌や語りの文化的伝統を持ちつつ、常に生成し続けている。両者はマジョリティ（健常者）社会から差別され疎外されてきた歴史を持つが、その一方でマジョリティとの対話や交流の歴史も持っている。二つの社会の「架け橋」を志向する活動は、今日において全国各地でどのように行われているのだろうか。発表者たちの歌や語りの実演を交えながら、多文化共生社会の実現に向けての展望を模索する。

第２回「多感覚で楽しむストーリーテリング」

▷ニコラ・グロウブ（イースト・ロンドン大学重度重複障害インクルーシブ・リサーチ教授）「マルチセンソリー・ストーリーテリングの重要性」

▷高野美由紀（兵庫教育大学教授）「障害等のある子どもとのストーリーテリング」

▷光藤由美子（松山おはなしの会会長）「英国などの民話を多感覚で楽しむ」
・コーディネーター・司会・コメンテーター：岡本広毅（立命館大学文学部准教授）

――人間は誰もが歌や語りを聴くことが好きだし、また誰でも歌や語りを自分の中に持っている。知的障害や重度の障害を持った人たちももちろん同様である。彼ら／彼女たちが歌や語りを共有するための手法である「マルチセンソリー・ストーリーテリング」を実践する英国の語り部と、彼女の理論と方法を学び、日本でその普及や新たな展開の活動に取り組んでいる２人の発表者たちが、この理論と実践について、語りの実演も交えながら紹介し、今後の可能性を展望する。

第３回「在日コリアンのアイデンティティ形成と伝承歌謡・説話」

▷黒川麻実（愛知県立大学准教授）「在日コリアンが語る韓国朝鮮の昔話ー在日コリアンの活動ー」
▷安聖民（立命館大学講師）「パンソリ演唱《興甫歌（ホンブとノルブ）》」
・コーディネーター・司会・コメンテーター：庵逧由香（立命館大学文学部教授）

――ヴァナキュラーな歌謡や説話はコリアン・在日コリアン・日本人、三者のアイデンティティ形成の独自性・多様性と共通性・連繋性のためのツールとなってきた。戦後日本において韓国朝鮮の昔話が絵本として出版され、国語教科書にも掲載されてきたが、在日コリアンの作家たちが重要な役割を担ってきた。また、大阪を中心にパンソリライブを長年上演してきた在日コリアンがいる。こうした活動はユニバーサルデザインとしての歌や語りの試金石となることを確認するとともに、今後の可能性を展望する。

第４回「スコットランドと山形における〈魂呼ばい〉の歌と語り」

▷マーガレット・ベネット（スコットランド王立音楽院教授）＆アラスダー・ホワイト（グラスゴー大学講師）「スコットランドの子守唄と弔い唄」
▷渡部豊子（語り部、日本民話の会会員）「山形の子守唄と弔い唄・弔い語り」
・コーディネーター・司会・コメンテーター：山﨑遼（立命館大学産業社会学部准教授）

――死の世界と生の世界とのあわいにある存在、それが生まれたばかりの赤ん坊であり、息を引き取ったばかりの死者である。前者に向けて歌われる「子守唄」、後者に向けて歌われる「弔い唄」や「弔い語り」、これらは共に、言葉の壁や生死の境を越えた〈魂呼ばい〉の歌と語りである。ユーラシア大陸の東西端に位置する２つの地、英国スコットランドと東北山形の〈魂呼ばい〉の歌と語りに、「人はなぜ歌い、語るのか」という人類史的視座から、ユニバーサルデザインとしてのヴァナキュラーな歌と語りの原像を探る。

発表者のコメント

＜第１回　広瀬氏＞

鵜野先生、ご返信ありがとうございます。感想も読ませてもらいました。とりあえず、好評だったようで、ほっとしました。僕の発表は「語り」ではなく、「話」が中心だったので、やはり手話パフォーマンスのインパクトには勝てませんね。瞽女唄や平曲のCDを聴いてもらうことも考えましたが、今回は持ち時間が限られていたので、あきらめました。

最後、質疑応答の所で、時間があれば発言したかったのですが、手話の語りは基本的には目で見て理解し、楽しむものです。つまり、直接的には僕には伝わりません。一方、僕のユニバーサル・ミュージアムでは積極的に「音」を使います。もちろん、いろいろ工夫はしますが、音そのものは、ろう者には楽しんでもらえません。しかし、ユニバーサルには多様なスタイルがあっていいし、視覚障害者発のユニバーサルと、聴覚障害者発のユニバーサルは違っていて、いいと思います。この辺がユニバーサルの難しさ、奥深さですね。

＜第１回　藤岡氏＞

【広瀬先生のご講演をお聴きして】
「点字」を「手話」に、「盲」を「難聴・ろう」に置き換えながらお聴きすると私には分かりやすく、そ

うそう！と納得したり、へぇーっ！！と気づきがあったりで時間があっという間でした。瞽女と山奥に住む人たちとの「互換」のお話も深く響きました。「自立」「自律」、「始点」「支点」「視点」、「触覚」など 広瀬先生の言葉選びがやさしくて分かりやすかったです。どうもありがとうございました。下記は、拝聴しながら特に書き留めたメモです。

■「わたしたち」と言う時、そこは”閉じた世界”か”開かれた世界”か。…発信する側の意識が大切

■ 備わっている「5感」をみんながフルには使っていない（使えていない）。それぞれのバランスで使っている。視覚以外の感覚で成り立っている情報（第6感）を使う。…きこえない人たちも「勘が良い」と言われる人が多いです。納得！

■ 見えないものをみる…テレビをみるとおっしゃっていたのがとてもびっくり！バッティングの「音」で「当たり」の見当をつけるお話、印象的でした

■ 「インクルーシブ」「ユニバーサル」

■「点字を使えない不自由」「点字を使わない自由」…手話の世界でもまさに！！どちらの言葉も身をもって実感しています

■ 小学４年生で点字・手話に触れる。現状は福祉的文脈で「助けてあげましょう」の一辺倒。「日本語が唯一の方法ではなく、そこに優劣はなく、その方法を使っている人たちがいるんだよ」の視点から。…人権教育の講師として小学校へ行かせていただく時に感じていた心のモヤモヤが晴れました！

【半澤啓子さん・穀田千賀子さん手話民話語り】

まるで絵本のページをめくって絵を見ているかのように、登場人物が分かりやすく自由自在に変化していて（それはもう半澤さんの身長や着ている服も変わっているのでは？と思える程に）、兄弟の会話や、継母が子を叩く音や、観音様の指についたご飯粒などの「声」「音」「もの」も目に飛び込んでくるよう！観音様が継母を叱るシーン圧巻でした。

後からお聴きしたら、穀田さんは登場人物に合わせて声音を変えておられて、半澤さんはその声を聴いて演じ分けておられるとのこと。私には穀田さんのお声が聞こえないのが残念でもったいないことでしたが、半澤さんの全身で表現される手話から、穀田さんが発しておられるお声がきこえてくるようでした。お二方で研究されながら磨きあげてこられた表現、本当に素晴らしくあんな間近で拝見させていただくことができて幸せでした。どうもありがとうございました。あえて字幕は出されなくて声と手話だけでのパフォーマンスでしたが、グイグイひきこまれて拝見しました。内容もよく分かりました。

＜第２回　光藤氏＞

岡本先生、鵜野先生、学生さんのコメント、ありがとうございます。皆さん、しっかり講義を聞いて自分なりにつかんだことを表現していて素晴らしいと思いました。ニコラさんもきっと喜ばれると思います。Zoom で参加した友人から、私への励ましの感想もあり、今回企画に参加させていただいたこと、本当に感謝申し上げます。

＜第３回　安氏＞

金曜日は楽しく有意義な時間をありがとうございました。庵逧先生、字幕に司会に打ち上げまで、本当にお世話になりました。とても美味しかったです。

＜第３回　黒川氏＞

コメントの共有ありがとうございました。大変励みになります、引き続き色々頑張って参りたいと思います。貴重な学びと温かな交流の場をいただき、心より感謝申し上げます。打ち上げのお食事も本当に美味しかったです。

参加者の感想

＜第１回＞

・民話の語りに伴う手話、先生のおっしゃる通り「手」のみならず全身で表現されていて、惹きつける力を感じました。「目で見る民話」という印象を受けました。

また、最後の質疑応答で触れられた、「手話のリズムと日本語のリズムの違い」という点、私はそういうものがあるのかと初めて知りました。ちょうど今、小学生に日本語を教えていまして、日本語のリズムについて考えているところでしたので、とても興味深く思いました。

さらに、「歌詞の言葉を示すだけではなく、意味を

伝える手話」という視点も、そのようなことを考えたことがありませんでしたので、目を開かれるような思いがしました。
　幼稚園や小学校でも、子どもが歌に手話をつける試みがされていますが、こうした視点は大事だなとあらためて思いました。

・琵琶なし琵琶法師の教授も、手話語りの二人も、手話歌の方も、スーパー・パフォーマーの方々でした。今回連続講義に参加しなかったら、そういう方々の存在を知らずに一生過ごしたことでしょう。

・目から鱗、でした。広瀬氏の話は、なかなか良かったですね。健常者では気づかなかった点を話しておられ、なるほどと納得です。
　「手話で民話を語る」も、なるほどでした。東北方言の民話の手話でしたが、右側で文字が出ていたので理解できたと思います。
　手話うたパフォーマンスも画面が美しく，歌もみごとでした。語りにもいろいろな立場で，別な言語表現があることが理解できたのは収穫でした。

・民博の広瀬先生のご発表、私にとってはとてもタイムリーで参考になることが多々ありました。視覚支援学校に関わっておりますので、「見る」ことと「みる」ことの違い、inclusive を目指すことでかえって失われる独自の文化、など考えさせられました。
　それから、穀田さんと半澤さんの語りと手話表現にも魅了されました。穀田さんの語りも、いつまでも聞いていたい味わいのある語りで、気仙語が思った以上に伝わってきて嬉しかったです。

・広瀬さんの講座を大変興味深くお聞きしました。インクルーシヴ教育の優れた面とこぼれ落ちる面、五感と多様性（互換と他用性）感覚のバランスについて、触るマナーについて、当事者主権のこと、視覚を使わない自由、考えさせられること、気づきが多くありました。
　二部の「こまもり観音様」、方言が心地よく、全身での手話があることで、お芝居を見ているようにおはなしの映像が浮かび、楽しませていただきました。
　藤岡さんの手話歌は「手話は空間の絵であり芸術である」と言われた通り美しく感動的でした。

・半澤さんの民話の手話語りは、迫力がありました！　東北の地域の言葉は味わえませんでしたが、手話に魅了されました。素晴らしかったです。もう一度、字幕だけを見て、東北地域の言葉を味わってみようかなと思います。
　藤岡さんはメイシアターでの手話うたコンサートでは字幕がバックや左端にあり、藤岡さんは舞台いっぱいに身体で手話で表現されるので全く聞こえない私も聞こえる人と一緒に楽しめます。今回は藤岡さんが作られた字幕がパソコン画面全面にアップされていて、藤岡さんの姿が画面の右上端にありましたので、歌の雰囲気が伝わりませんでした。画面を反対にできないかと思いましたが、動かせませんでした。それがちょっと残念な気持ちです。

・トップバッターの広瀬先生のお話は、吟遊詩人とリンクするような盲目の女性旅芸人というテーマもさることながら（博論を書いていた頃は女性詩人の生き方、「声」に関心があり、サッフォーや竪琴、即興詩人なども連想しました）、レジュメのポイントの提示の仕方また話のまとめ方がとてもスマートで、とても参考になりました。

半澤さんと穀田さんのパフォーマンスは、語り担当・手話担当のどちらもお互いにものすごく合わせているはずなのに、それを感じさせることなく自分の「ことば」の表出に力を込められている点に圧倒されました。

藤岡さんの手話うたパフォーマンスについては、以前うたかたネットで催しのご連絡をいただいた時に調べていたのですが、一緒に手話をしながら歌うのが、純粋に楽しかったです。と同時に、ものすごく体力を使うことに気づき、藤岡さんのタフさに敬服しました。「30 歳（でしたか？）まで手話を知らなかった」とのお話に、今の時代であれば（極端な表現かもしれませんが）教育弱者となる、あってはいけない話だと衝撃を受けました。

・１回目の視覚と聴覚障害の方々のお話や実演で考えさせられるものがありました。広瀬さんの話は先日ラジオで聞いて、興味を持っていたのでより鋭く伝わってきました。博物館が視覚障害の人にとってもわかりやすく、「触る」博物館にしたことで、健常者にも人気が出て訪れる人が増えた話などは、聞いただけで行ってみたくなります。

また、「手話は見ても美しい表現、美しい言葉で、空間に絵を描くように表現していく」という言葉通り手話うたに感動を覚えました。私たちがあまりにも視覚に頼りすぎて五感を十分に使っていないことに気づかされます。

・とても良かったです。穀田さんの方言読みも半澤さんの手話表現も素晴らしくて、涙ポロポロ流しながら見ました。ありがとうございました。

・東北の民話を 30 年間、よくぞ続けていただいたと思います。懐かしい訛りの数々。今は東北も方言が消えつつありますが、以前 NHK で方言の特集をしていた時に語っていた人の言葉を思い出しました。「それは、使わなくなった人が増えたから、使わなくなった現代の私たちの責任だ。方言には、方言の素晴らしい伝達がある。消してはならない」 これって手話とおんなじだなぁと改めて思い返しました。感動しっぱなしです。

・手話民話とーーーっても素敵で目が離せないというか、惹き込まれました！！　字幕がなくても十分お話伝わりました。

・半澤さんお１人で手話されているのに何人も登場人物がいるようで、見入ってしまいました。

・宮城県出身の姑が、一緒に動画を見てとても懐かしそうに、嬉しそうにいろんな話をしてくれました。

＜第２回＞

・ニコラ先生のお話の中で PMLD の人々のことを〝too disabled to count as people〟とみなす人の存在があり、憤慨しました。先生のダイナミックな視座、ストーリーテリングの技術だけではない人生や生き方、この世界の本質に関わるお話に魅了されました。“Multisensory storytelling is a tool for changing the world,” “Stories change minds,” “Facts do not change mind” という言葉は、ずっと忘れないと思います。

高野先生と光藤先生のお二人はうたかた研でご一緒させてもらっているので、親しい気持ちでお聞きしました。高野先生のお話からは、ニコラ先生の理念に共感しながらも日本のコンテクストに応じて子どもたちに無理なく取り組んでもらおうとする姿勢がうかがえました。光藤先生のお話にはマザーグースが登場し、「マルチセンソリー」というのは何も小道具を使うことだけではなく、パターンの繰り返しを多用する話を用いることでオーディエンス参加型にするのも該当するのだ、と身をもって学びました。

・ストーリーテリングはとても興味深く、本も購入しました。日本でストーリーテリングというと、なんとなく、石井桃子さんや松岡享子さんの東京こども図書館の「おはなしのろうそく」のストーリーテリングが正道で、道具や身ぶり手ぶりを使ったものは邪道というような認識があるように思います。（なんとなく…ですが）

スマホ時代の子どもたちとはいえ、おはなしのおもしろさは引き込まれるので、支援が必要な子かどうかにかかわらず、多感覚で楽しむストーリーテリングも可能性があるように思いました。

・（学生のコメント）ニコラ先生の話の中で、マルチセンソリー・ストーリーテリングのお話をききながら、見る・聴く・嗅ぐ・味わう・触れる・体験する、これらすべてが語りの一部として機能するという話がありましたが、どれも一部にすぎず、どんな人に対しても伝わる表現方法はないのかと考えていました。しかし、「ひとつの表現方法で人間のコミュニケーションが完全にカバーすることはできない、だから多様な表現が共存する文化が必要だ」ときいて、非常に納得しました。

・（学生のコメント）高野先生のご発表で、ニコラ型の MSST のことが良い点や強みという面で深く理解できました。多感覚で楽しむことでその子どもの成長や発達の助けになることが分かりました。確かに自分の幼い時を振り返っても、さまざまな感覚を使った経験の方が覚えやすく、記憶に残っていると感じました。マナハナちゃれんじのお話では、自分で考えたりお話をつくったりすることで、伝える力や想像力だけではなく、あきらめない力までも得られるという点がおもしろいなと感じました。

・（学生のコメント）光藤先生はいくつかのストーリーテリングをして下さったが、「おばあさんと豚」の話がとても面白かった。高野先生の話で学んだ、ストーリーテリングには繰り返しが多い形式を、体験できてよかった。私自身も、動物の時（「雨を降らせたスズメの話」）に鳴き声で参加できてうれしかった。この体験を通して、とてもうれしい気持ちや楽しい気持ちになったので、誰であっても、何歳であっても、お話をきいたり語ったりすることはとても重要で楽しいものなのだ、ということに気づかされる経験ができました。ありがとうございました。

＜第３回＞

・韓国の昔話の資料、国の歴史に従ってお話の内容が変わっていくこと、などなど。またパンソリの安聖民さんの張りのある大地に根付いた声に圧倒されました。

・在日コリアンのお話は、実は自分とは一番遠いところにあると感じて、あまり期待していませんでした。ですが、若さとやる気に満ち溢れた黒川先生を拝見し、またテクスト分析もここまで徹底的にやらなければ、と分野を違っても同様にテクスト分析をするのであれば見習わないといけないと心から感じ

ました。

パンソリ、元気をもらわない人はいませんね。すべてを投げ出してパンソリ修行に出られた安先生の生き方に脱帽です。オーディエンスを巻き込む力は、いろんな場面で活用できますし、参考になりました。

・今日はありがとうございます。毎回すごいお話やらパフォーマンスやらを見せて、聞かせてもらっています。黒川先生は探求心旺盛な方で、一つの昔話が朝鮮半島と日本でどのように伝わって来たのか、興味をかき立てられます。最近、国民の不満を背景に、日本でも他の国でも「まず自国」という妙な風潮が広がりつつあります。こういう時だからこそ、黒川先生のようなユニバーサルな活動は一層今後が楽しみです。

安さんのパワフルな口承によって、日常的な場から一瞬にして大陸を渡る空の旅に連れ出される、不思議な気分を味わうことができました。「太鼓をたたいた方が」と言っておられたのが、非常に印象的です。中世以来の芸能である「祭文」を唱える人も、ただ称えるよりも「弓」の弦をたたきながら唱える方が、唱えやすいと言っている例があるからです。太鼓をたたく行為にも、弓の弦をはじく行為にも、ある場所を非日常的な空間に変える上で大事な働きがある気がします。

インドの『ジャータカ物語』と朝鮮半島の伝承、日本の昔話の関係についての話も、おもしろかったです。

・在日コリアンが朝鮮と日本を意識すると否とにかかわらず架け橋となって逞しく過ごしていることと、朝鮮の民話「三年峠」がわが国の低学年の教科書で親しまれていることを微笑ましく思いました。解説付きのパンソリ演奏もなかなか良かったです。ありがとうございました。

＜第４回＞

・鵜野先生からお聞きしてご著書も拝見したことのあるマーガレット先生に直接お目にかかれないのは残念でしたが（とは言っても、オンライン参加だと二重に画面越しというだけで、良く考えるとあまり変わりませんね）、lament の唄を唄ってばかりではなく、″life must go on″という表現をお聞きできたのも幸いでした。

ホワイト先生は講座の趣旨に沿ってしっかりとお話を組み立てられていたのですが、私がゲール語を理解しようと懸命になるあまり、話の筋がつかみにくくなってしまいました。ですが、ペットボトルを手に取られる時に″I've got to take a wee drink of water″と生きたスコットランド英語を聞き、興奮しました。

渡部さんは、本当にリラックスされてお話をされていたのが印象的でした。「ねろねろ」と歌っているだけの子守唄や何にでも「～こ」をつけたり「食べなさい」「かゆい」「髪の毛」のすべてをイントネーションだけ変えた「け」で表現するという小話も面白く、tiktok やインスタというようなメディアでショート動画にしても若者受けもすると感じました。

渡部さん推しだと公言されていた先生が渡部さんの語りに心酔しておられるのを拝見できたのも、嬉しい時間でした。

・スコットランドの子守唄、弔い唄はベネット先生の生声は聞けなかったものの、今回のために準備くださったお声を聞けて良かったと思いました。ホワイト先生のゲール語での子守唄など聞かせて頂き、そのメロディラインと歌声が、その土地に住む人々の魂から出ていることに気づきました。

最後の渡部さんの話は深く心に響くものでした。山形弁だからこそ伝わってくるものはやはりその土地に伝えられている多くの人々の声であり、思いであるのだということを再認識させられました。

＜全体を通じて＞

・もうこれで連続講座が終わりなのか…とロス感にとらわれていました。今回の連続講座では、一方的に研究成果を発表する普通の形のものと全然ちがう経験をしたと感じます。鵜野先生が「語りは東北地方の人の心に元気を取り戻した」ように言っておられたと思うのですが、その意味が少し分かった気がします。私は知識を得るために参加させもてらったつもりだったのですが、毎回単なる知識以上の「元気」のようなものを受け取って家路につきました。

・講演とパフォーマンス、理論と実践のような組み合わせで、頭にも心にも楽しいぜいたくなひとときを過ごさせてもらいました。2 回目のみ後日のビデオ視聴で、後はリアルタイムのオンラインで参加しました。ビデオ視聴は自分のペースで速度を変化させたり、気になった箇所を繰り返し視聴できたりという利点がありますが、リアルタイムオンラインだと資料の配布があるのがいいですね。

鵜野先生のご定年前の集大成の１つであるイベントが無事に幕を閉じたこと、お祝い申し上げます。貴重な機会をありがとうございました。この体験で考えたこと、学んだこと、得られた知見を、私自身公私にわたる場面でフル活用していく所存です。

・今回の講座を通して、私たちのやっていることはほんの限りのあることで、いつも自分の認識以外に沢山の人がいてみんな表現していることに気づくこと、それが今私たちに必要だと痛感しました。いつもたくさんの情報を送ってくださり感謝します。これからもよろしくお願いいたします。近かったら、ぜひ安聖民さんのパンソリを聞きに行きたいと思いました！

・4 回にわたる講座、どの講座も鵜野さんが出会った方々から直接話を聞いての構成、素晴らしいと思いました。理屈でなく実践している方々の思いがじかに伝わる、よい講座でした。お疲れ様でした。

おわりに

今回の連続講座には、各回のコーディネーターとして岡本広毅先生、庵逧由香先生、山﨑遼先生がご尽力下さった。また、国際言語文化研究所職員の野村道子さんをはじめ、会場設営やオンライン配信や文字通訳など、大勢の方々がスタッフとしてご参集下さったおかげで、無事終了することができた。

ただ一つ、会場での対面参加者が少なかったのが残念だった。より効果的な広報の方法を模索していくことが次回への課題だと感じている。

講座の内容は、言文研の紀要にて刊行される予定で、多くの方に読んでいただけることを願っている。

本当にありがとうございました。